二〇二六年度

入学試験問題

国語

注意
・指示があるまで開いてはいけません。
・答えは解答用紙に書きなさい。
・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
・句読点や「　」などの記号も一字とします。
・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。
・解答用紙上の消しゴムの消しカスは、しっかりはらっておきなさい。

一　次のカタカナを漢字に直しなさい。

(1)　キカイ体操　(2)　文章をネる　(3)　気持ちが晴れてツウカイだ　(4)　バンシュウの候　(5)　収入インシ

二　次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

おかあさんのりぼん　おーなり由子

こどもができたとたん
まわりのひとたちから
「おかあさん」と呼ばれる
しらないひとからも
――おかあさん

まるで違う人になったかのように
自分の名前は　呼ばれなくなる

急に「おかあさん」と呼ばれても
おかあさんになんてなれないから
心のなかで　しかめっつら
名前のない「おかあさん」のなかには
「やさしくあかるく　がまんづよく」
も　はいっている時があるから
ますます　しかめっつら
――やさしくなくて
あかるくなくて
すぐに弱音をはくわたしは
どこに行けばいいんだろう

Ⓐ生まれたばかりのあかんぼうは
まだ目も見えず
わたしのことを
「おかあさん」なんて呼ばない

Ⓑわたしはわたしよ
と足踏みして

(1)　――Ⓐ「生まれたばかりのあかんぼう」とありますが、少しずつ成長するあかんぼうを別のものに例えた表現を詩中から十二字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

(2)　――Ⓑ「わたしはわたしよ／と足踏みして」には〈わたし〉のどのような思いが込められていますか。
ア　自分の思ったように子育てがうまくいっていない落胆
イ　おかあさんという型にはめられてしまうことへの葛藤
ウ　今後は母親として全力で生きるために進み続ける決意
エ　愛する我が子の前で頼もしい母を演じたいという衝動

(3)　この詩で用いられていない表現技法をすべて選びなさい。
ア　比喩　イ　反復　ウ　擬人法　エ　擬音語　オ　擬態語

(4)　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

子どもが生まれることで、作者に与えられた〈おかあさん〉という新しい役割。はじめは「おかあさん」と呼ばれることが受け入れられず、心のなかでしかめっつらをしていた。自分の名前は呼ばれず、まるで居場所がなくなったような感覚の中で、懸命に子育てに励む様子が描かれている。
転機となるのは子どもの「おかあしゃーーあん」というひと言。苦しみながらも小さな命を守ってきた作者にとって、そのひと言は子どもからの［Ⓒ］であった。その時、作者の心にⒹ母である自分を認められたような光が差し込み満たされていった。子どもを授かるという奇跡。これからは母としても自分の人生を歩んでいくだろう。

①　［Ⓒ］に入る語を詩中から一語で書きぬきなさい。

ほころびかけた花のつぼみを見ていた

そうして
お乳をあげて　おむつをかえ
はいた乳をふき　背中をさすり
けしつぶみたいな　つめを切り
頭をぶつけては　おろおろして祈り
泣きやまない夜に途方に暮れたり
髪ふりみだして　追いかけたり
食べさせたりするうちに
ああ　もう！
なんと呼ばれようが　どうでもいいや！
と、思うようになるころ

――おかあしゃーーあん

ことばなんか知らない
赤くてふにゃふにゃだった生き物が

――おかあしゃーーあん

わたしを呼ぶ

そう呼ばれたとき
わたしのなかは
やわらかいあたたかいもので
いっぱいにふくらみ
その一瞬に
りぼんをかけて
かざりたいような気持ちになった

その声が
「おかあさん」ということばが
なにかの
ごほうびのように思えて

（おーなり由子『だんだん　おかあさんになっていく』PHP研究所）

②　――Ⓓ「母である自分を認められたような光」を言い表す言葉を詩中から十二字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

(5)　詩全体について適切なものを選びなさい。

ア　子育てに追われる状況を、筆者の心の中のセリフを効果的に用いながら描いている。
イ　周囲の思う理想の母親像を受け入れ奮闘することで、母親の愛情を表現している。
ウ　子どもが生まれてから自分の名前が呼ばれなくなったことへの不満を訴えている。
エ　子どもの世話をすることへの自信を高めていく様子が第三者の目線で語られている。

三　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「自己と他者」というように、自分と他者は異なるものと捉えられがちですが、一人の人間の中にもいろいろな側面があり、また、それは時間によっても変化します。あなたにも、自分の中に優しい心情や醜い心情を同時に見つけたり、何かのきっかけで数年前とすっかり変わってしまった自分に気づいたりすることがあるでしょう。

それと同じように、目の前の文章を「書いていた」自分と、それを「読んでいる」自分も、決して同一ではありません。書き手としてのあなたが書いた文章を、読み手としてのあなたが読む。そこでは二人の他者が出会っているのです。

この時、読み手としてのあなたは、かつて自分が書いた文章にどう反応するでしょうか。ある時には、それまで想像もしなかった自分の新しい一面を文章の中に見つけて、驚くこともあります。そういう驚きと発見が生じる瞬間は、なにものにも代えがたい書くことの喜びです。また、そこから、過去の自分と今の自分の対話が自然と始まることもあります。「こんな一面が自分にあるなんて知らなかった」「この時の自分はそんなふうに感じていたんだ、それはなぜだろう」と、読み手としてのあなたは、自分の書いた文章をめぐって、Ⓐとりとめもない解釈の旅に誘われることでしょう。書き、読むことは、自分という他者との対話なのです。

でも、あなたがいつも自分に好意的な読み手かというと、決してそんなことはありません。むしろ、僕たちはつい誰か架空の人物を脳内に住まわせて、自分の文章を辛口で批評してしまう。「こんな文章、ありきたりでつまらない」「読む価値がないね」「そもそも読みにくい」「駄作だ」「才能もないのに馬鹿みたい」。こうして僕たちは、Ⓑ自分の声で自分を縛ってしまうのです。

書き手を襲う内なる自己*検閲の声にどう抵抗するか。それは、経験や技量を問わず、全ての書き手にとって切実な問題です。今や自分に本当にあったのかすら定かではない、作品の出来不出来を気にせずにただ楽しく書いたような時代に、もどることはできないのでしょうか。

最近僕がやっているのは、この自己検閲の声の主に「ケンエツくん」と名前をつけること。ケンエツくんは意地悪で気まぐれにやってくる、Ⓒなかなか手に負えないキャラクターですが、ひとまずこうして自分に向かうネガティヴな感情を「他の誰かの感情」に転換することで、［　　Ⓓ　　］。

【中略】

自己検閲の声を生むのは、結局のところ自分の文章への自信のなさや、そこから生じる不安です。そして、それを完全に解消するのは難しい。僕たちにできるのは、自分だけでなく全ての書き手がこの不安に襲われる事実をたよりに、自分なりの対処法をなんとか見つけることくらいでしょう。

そして、この不安は、悪いことばかりではない、とも伝えておきたい。というのも、この不安を抱えているあなたは、他の人に読んでもらえる良い文章を書きたいと、きっと心のどこかで願っているのだろうから。あなたは、すでに他者に開かれようとしている。他者の視線は、確かにあなたを苦しめるけれど、同時に、それがあなたを書くことに向かわせもする。結局のところ、Ⓔ書くことと他者をめぐるその二面性を、僕たち書き手は受けとめて進んでいくしかないのでしょう。

自分という他者が、あなたの内に住む想像上の他者だとしたら、あなたがそれよりも恐れているのは、生身の、実在の他者に読まれ、評価されることかもしれません。【中略】

そう思ったら、まずは、仲の良い友達や信頼できる学校の先生などに、勇気を出して文章を読んでもらいましょう。その時に厳しいコメントをされるのが不安だったら、「いいなと思ったところを教えて」とお願いしましょう。何しろ、「自分という読者」は辛口な評論家になりがちです。よほど経験を積まないと、自分の文章の欠点ばかりが目について、良いところは見つけられません。そんな時に他の人の手を借りて自分の文章の良さに気づくことは、あなたが書き手として成長する大事なステップでもあります。

そうして、自分の文章に読者から反応をもらえた経験は、照れくさくもあるものの、書き手として歩き始めたばかりのあなたを、しっかりと後ろから支えてくれます。自分という人間の一部が、誰かに届いたという手応えが、確かにある。その手応えが、あなたの次の足取りをたしかにする。書いたものはそうやって読み手に受け取られ、読み手の人生に少しだけ影響し、その

反応がまた書き手に届いて書き手の人生を変えていく。その豊かな循環が起きる時、書くことは読むこととつながり、一人の営みから人々のやり取りに変わっていきます。

完成前の下書きをより良くするために、他の人に読んでもらうこともできます。作家スティーヴン・キングは、自分の著作の中で、「［　Ⓕ　］」という言葉を紹介しています。書く時は一人の孤独な時間が必要だが、書き直す段階では、自分の心のドアを開けて、他の人の助けを借りる時間が必要だ、という意味でしょう。

でも、ただ助言を求めればいいわけではありません。そもそも文章への助言とは、文章をより良くするためのものなのに、これが本当に難しい。読み手と書き手が大切にしたい「良さ」が一致しない場合も多いからです。

そこで、誰かの助言を求める時に大事なのが、「助言を聞く素直さと、聞かない勇気を持つ」ことになります。

「助言を聞く素直さ」とは、相手の助言の背後にある「良さ」の感覚にいったん耳を傾けること。書き手は文章を書き始めますが、その意味を最終的に確定するのは読み手なのだから、書いたものが、書き手の意図通りに受け取られることはまずありません。そのため、あなたの意図はどうあれ、「この人にはこう読めた」事実を、まずは素直に受け入れる必要があります。そしてできれば、「この人がそう読んだのは、どんな「良さ」の感覚があるからだろうか」まで考えてみる。そうすれば、相手の助言の背後にある思いも受け取ることができるでしょう。

しかし、Ⓖより難しく、大事なのは、助言を聞かない勇気を持つことです。書いた文章の意味を確定するのが最終的に読み手だとはいえ、書き手には自分が書きたいものを書く権利がある。助言をもらう時、あなたは助言者の大事にしたい「良さ」が何なのかを想像した上で、それが自分の大事にしたい「良さ」と一致しているのかを、考えなくてはなりません。そして、一致していないのであれば、時には勇気を持って助言を無視する必要があります。そうでないと結局、自分が書く動機を誰かに手渡してしまうことになる。また、助言者が複数いる場合は、えてして異なる方向への助言をするもの。それを全て自分の文章の中に取り入れたら、文章はどんどん丸く、つまらなくなり、結局のところ誰の心にも届かない退屈なものになるだけでしょう。【中略】

でも、一歩踏み出して、あなたの書いた文章を実在の他者に開くと、それは直接外の世界とつながり始めます。そして、周りの人の世界をちょっと豊かにしたり、めぐりめぐってあなた自身に思いがけない喜びをもたらしたりすることもある。そうでないこともある。書いたものを外に開くことは一種の賭けですが、その賭けがもたらす豊かなつながりの可能性を、どうか忘れずにいてください。

＊検閲＝文章の内容や表現を強制的に調べること。

（澤田英輔『君の物語が君らしく―自分をつくるライティング入門』岩波ジュニアスタートブックス）

(1) ――Ⓐ「とりとめもない解釈の旅」とはどういうことですか。

ア　過去の自分が書いた文章を改めて読む行為により、自分でない他者と共に時間をさかのぼって様々なことを考える。

イ　目の前の文章を書いたのが数年前の自分だったとしても、手がかりが得られるまで文章を読むのは大変な作業だ。

ウ　書き手としての自分と読み手としての自分を同時に尊重することは難しいため、穏やかに理解し合うことは難しい。

エ　昔自分が書いた文章は他者の文章に思えることもあるので、その文章を理解するのには時間を要する場合もある。

(2) ―Ⓑ「自分の声で自分を縛ってしまう」について、あとの問いに答えなさい。

① ここでの「自分の声」とは、ア「目の前の文章を『書いていた』自分」か、イ「それを『読んでいる』自分」のどちらですか。記号で答えなさい。

② 「縛ってしまう」とはどういうことですか。

ア 挑発的になる
イ 対話的になる
ウ 否定的になる
エ 強制的になる

(3) ―Ⓒ「なかなか手に負えないキャラクター」について、あとの問いに答えなさい。

① その特徴を端的に言い表した表現を本文中から六字で探し、書きぬきなさい。

② その特徴とは反対の意味を表す表現を本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

(4) Ⓓ に入る語を答えなさい。

ア 書き手が襲われる不安をなくせる
イ 自分の中の優しい感情を見出せる
ウ 文章の質を上げることができる
エ 少しでも切り離すことができる

(5) ―Ⓔ「書くことと他者をめぐるその二面性」とはどういうことですか。

ア 自分のなかに想像上の他者を住まわせることで、自分のなかに他の人が入り込むという二重の構造が成立する。
イ 他のひとに文章を見られる可能性があると思うことによって、私たちの書く文章は読みやすくなり改善される。
ウ 自分が書いた文章に太鼓判を押せないと考える一方で、他の人によい文章を読んでもらいたいとも思っている。
エ 自分の文章に否定的なコメントをする存在は、頭のなかの想像上の他者だけでなく、実際の社会にも存在する。

(6) Ⓕ に入る語を答えなさい。

ア ドアを閉めて書け。ドアをしめて書きなおせ。
イ ドアを開けて書け。ドアをあけて書きなおせ。
ウ ドアを閉めて書け。ドアをあけて書きなおせ。
エ ドアを開けて書け。ドアをしめて書きなおせ。

(7) ――Ⓖ「より難しく、大事なのは、助言を聞かない勇気を持つことです」と筆者が述べる理由はどれですか。

ア　助言者のアドバイスは必ずしも有益なものとは限らないので、すべて取り入れると文章は良くならないから。
イ　助言者と書き手の考える「良さ」が異なるとき、助言者の意見ばかり優先すると文章は魅力的にならないから。
ウ　読み手と書き手が大事にしたい「良さ」が一致しない場合は多く、助言は素直に受け入れる必要があるから。
エ　書き手の意図した通りに助言者は文章を読むはずで、助言の背景にある思いを受け取ることは意味がないから。

(8) 本文の内容に合っているものを答えなさい。

ア　孤独な作業の先に、実在の他者に文章を読んでもらうことで自分の一部を誰かに届けたことを実感できる。
イ　文章を書く際の下書きは何度も書き直すのではなく、自分の直感を信じて一気に書き終える方がよい。
ウ　自分が書き手として成長するためには、自分のなかにいる他者ときちんと対話し、客観視してはいけない。
エ　自分が数年前に書いた文章を読んで新しい発見が得られるのは、文章の書き手として成長したからだ。

四　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

都市伝説の多くは、幾分かは「あり得る話」と思うかもしれないが、基本的には情報としては眉唾ものである。そもそも、Ⓐ冗談やウソであってもさほど問題にならないようなことがテーマとなっているものも多く、表だって言い出すことのできない意見や感情の発露とは言いがたいものも多い。都市伝説に顕著に見られるようなうわさの特徴を捉えるには、「古典」とは別の視点が必要である。そこで、視点を変え、なぜうわさをするのか、人びとの動機の面から考えてみよう。

まず、情報としてのうわさは「知りたい」が中心である。自分が巻き込まれた状況がよくわからないため、その状況を理解したいと思う。同じように思う人たちがコミュニケーションを重ねるなかで生まれてくる情報がうわさである。【中略】

一方、世論としてのうわさは、「言いたい」が鍵になる。言論統制下にあって言いたいことが言えないがゆえに、うわさのかたちで言いたいことを表明する。ゴシップ（人に関するうわさ）が悪口になりがちなのは、表だって言えないことがうわさになるからだ。「言えないけれど言いたい悪口」がうわさの形式を借りて表明され、広まっていくのである。

そして、うわさに参加する大きな動機がもう一つある。それは、人と「つながりたい」である。人と人との日常的な会話、すなわち「おしゃべり」を通じてうわさは伝わっていく。人との関係を築く上で、うわさは役に立ってきたのである。

うわさには「ここだけの話だけれど」というⒷ枕詞がしばしばつく。

本当に「ここだけの話」ではない。実はその話をみんな知っていたという経験を持つ人は少なくないはずである。

「ここだけの話」という枕詞は、「他人は知らないことを知っている」という優越感の表明であり、「その話をあなたにだけに教える」と仲間意識を強めるために使われる。「二人が〝ここだけの話〟をたったいま共有した」という新たな「秘密」からは［　Ⓒ　］性も生まれる。秘密の話の共有は人との〝つながり〟＝関係性を強めてくれるのである。

さらに、「返報性の規範（norm of reciprocity）」も働く。心理学でいう「返報性の規範」とは、相手から好意や恩などを受けた場合、同等かそれ以上のお返しをせずにはいられなくなることを指す。

「私にだけ特別に秘密を教えてくれた」のであれば、自分がちょっとした秘密の情報を得る機会があれば、その人には真っ先に伝えようと思う。後日、そんな機会がやってくると、「ここだけの話」を今度はあなたからその人へ伝える。こうして、ますますその人との〝つながり〟＝関係性が強まるのである。

「ここだけの話」ではない場合も同じである。被災地での地区単位のライフライン情報など、政府の公式発表やマスメディアなど制度的チャンネルでは伝えられることのない情報はもっぱら口コミ＝うわさで伝わる。こういった人伝でしか入手できない情報とは、言い換えれば、誰もが入手できるわけではない情報でもある。それを誰から入手できるかと言えば、自分と関係がある人からである。

すでに述べたように、うわさは既存の人間関係を通じて広まる。「誰もが入手できるわけではない情報」を伝えてくれた知り合いには感謝し、［　Ⓒ　］感を抱くのであり、「返報性の規範」も働く。うわさは人との関係性を強化する。

人とつながる上では、気持ちの共有も重要である。【中略】

「大きな余震がきたらどうしよう」と強く不安を感じていると、自分だけで抱え込むより、誰かに話したいと感じる。そんなときに知り合いを見かけ、話しかける。知り合いと話すことで、自分の不安な気持ちを受け止めてもらうことができ、相手も同じように不安を感じていることがわかる。それだけで少し気持ちが楽になるのだ。［　Ⓓ　］、これがうわさのきっかけになることがある。うわさを通じて気持ちを共有することも、人との〝つながり〟＝関係性を強めるのである。

だからこそ、うわさを伝えてくれる相手には、その内容が事実に反するのではないかと思っても、なかなか言い出しにくいのである。せっかく「私」に伝えてくれたのに、［　Ⓔ　］だ。相手が「事実」だと確信しているようなら、相手が情報の真偽を見抜けなかったと指摘することにもなる。もっとも「ウソではないか」と疑問に思っても、自分自身その確証が持てない場合も多いだろう。だとすると、あえて疑問を出すことはしない。も

ちろんそれでも、事実関係が重要な話であれば、疑問を呈するかもしれないが、その場合でもやわらかく、相手との関係に配慮し、相手の Ⓕ面子をつぶさないようにするはずである。

また、「友だちの友だちが体験した」という話の場合、典型的な都市伝説であるとわかっても、普通あえて指摘はしない。都市伝説はネタとして楽しむために語られるからである。あえて指摘する人は、昔なら野暮、いまなら空気が読めない、と言われてしまう。

事実かどうか疑わしい話が広まるのは、うわさが既存の人間関係を基盤にしているためでもある。やはり、Ⓖうわさは事実性からのみ理解、評価することはできないのだ。【中略】

話を戻そう。話題に困ったときや場つなぎ、時間つぶしの話題として、共通の知り合いのゴシップ（人に関するうわさ）に花が咲くことは多い。お互いに知っている人の話なら、面白く、話も続くものである。［Ⓗ］、初対面の相手と話しているうちに、共通の知り合いがいることがわかって、「世間は狭いですね」などと盛り上がることもある。「共通の知り合い」は場つなぎになるだけでなく、初対面の相手との距離を縮めてくれるのだ。【中略】

ゴシップは話題にしやすいだけではない。ゴシップから学んだり、ゴシップを通じて集団規範を確認したりする。さらに、ゴシップは個人にとってもコミュニティにとっても必要なものである。

コミュニティと住民の精神衛生の関係について保健学的立場から研究を行っている岡檀は、日本のなかできわめて自殺率の低い田舎町、徳島県海部町（現海陽町）で、その「理由」を調べ、自殺予防因子として五つの要素を挙げている（『生き心地の良い町』）。そのなかで注目したいのは、「ゆるやかな絆」が維持されているという要素である。

岡によれば、海部町は物理的密集度がきわめて高く、住民同士の接触頻度は高い。しかし、その関係性は必要があれば過不足なく援助するというようなもので、緊密なものとはいえない。どちらかというと淡泊な関係性だという。人びとは複数のネットワークに属しており、人間関係が固定されておらず、赤い羽根募金や老人倶楽部入会を拒む住民がいるなど多種多様な価値観が混在している。古くからの小さな村落にありがちな「密接で、閉鎖的な人間関係」とは対極をなしているのである。

それだけではない。矛盾するようだが、海部町の人たちは「人に関心がある」という。ただし、「関心」は「監視」とは別物であり、とにかく他人に興味津々なのである。

たとえば、岡の調査期間中に海部町に引っ越してきた女性がいた。しばらくのあいだ、町の人たちは寄ると触ると彼女の動向を報告し合い、盛り上がった。とはいえ、彼女に対する評価は固定したものではない。多様性を重視するこの町ではうわさを通じてマイナスの評価もプラスの評価も併せた総合評価が行われるのである。そして、うわさ話の熱が冷める頃には、彼女はコミュニティにすっかり溶け込んでいたという。

つまり、海部町のゴシップは、よそ者をコミュニティに受け入れるためのゴシップでもあるのだ。岡はこのように海部町の人びとが「人に関心がある」原因を、この町が歴史的に人の出入りが多い土地柄であり、人びとは新参者の気質や能力を興味津々で観察し、評価してきたからではないかと推測している。【中略】

「ゴシップの対象にならない」とは人から関心を持たれないことであり、「うわさになる人がいない」とはみんなが関心を寄せる人がいないということである。ゴシップを通じて人はコミュニティに受け入れられていき、ゴシップを通じてそのコミュニティの一員で居続ける。コミュニティのメンバーになるということは、ゴシップの対象になることであり、ゴシップを交わし合うメンバーになることでもある。

（松田美佐『うわさとは何か』中公新書）

(1) ―Ⓐ「冗談やウソであってもさほど問題にならないようなことがテーマとなっているものも多く」とありますが、このように判断される理由を本文中から二十二字で探し、はじめと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。

(2) ―Ⓑ「枕詞」の意味はどれですか。

ア　周りを遠ざける言葉
イ　範囲を狭める言葉
ウ　相手を尊重する言葉
エ　前置きとなる言葉

(3) Ⓒ（二箇所）に共通して入る語はどれですか。

ア　限定　　イ　閉鎖　　ウ　親密　　エ　共通

(4) Ⓓ・Ⓗ（太線）に入る接続詞を答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア　あるいは　　イ　そこで　　ウ　つまり　　エ　ところで　　オ　しかし

(5) Ⓔ に入る語を答えなさい。

ア　偽証だと証明すると、相手との距離を縮められなくなるから
イ　気持ちの共有を否定すれば、関係性の強化ができなくなるから
ウ　相手の話を疑えば、今までの関係性も拒絶することになるから
エ　正面切って否定すれば、相手の好意を無にすることになるから

(6) ―Ⓕ「面子をつぶさない」とありますが、左の表現は「面子をつぶす」と同じ意味を表す慣用表現です。ひらがな五字を入れて、完成させなさい。

顔に○○○○○

(7) ―Ⓖ「うわさは事実性からのみ理解、評価することはできない」と判断される理由を説明するものとして、最も正しいものはどれですか。

ア　「言いたい」「知りたい」「つながりたい」という三位一体によってうわさは成り立つから。
イ　信憑性よりも人との関係性の方が重視されるため、事実ではないうわさも含まれるから。
ウ　コミュニティの中でうわさは潤滑油であり、我々の社会生活に必要不可欠な存在だから。
エ　最初からうわさの真偽を見抜こうとしてうわさを聞くのではなく、楽しければいいから。

(8)

次の説明は、本文の内容に関わる文章です。あとの問いに答えなさい。

我々は誰かと顔を合わせると、必ず何か話題が必要になる。久しぶりに会う相手なら、お互いの近況を話すだけでもある程度時間が経つだろうが、そのうち話のネタが尽きる。そうなると、同窓会のように「いま、どうしてる?」から始まった話が、いつの間にか昔の話へと移り、①大いに盛り上がる。なぜなら、昔話は「共通の話題」であるからだ。

一般に、うわさ・ゴシップと言われると、あまり良い意味で用いられることの方が少ないかもしれないが、実際には、それによって秘密や緊張・不安といった感情を会話を通じて相手と〔　ア　〕することで、互いに報告し合い、人は時に安堵し、〔　イ　〕意識がより強固になるという一面もある。

特にエンターテイメント性の高いものや、既存の人間関係で生まれたものの中には、様々な要因によって真偽が確かでないものも含まれ、鵜呑みにすることは危険であるが、うわさやゴシップについて多面的に捉えることは興味深い。

① ――①「大いに盛り上がる」を本文中ではどのような慣用表現で表していますか。本文中から五字以内で探し、書きぬきなさい。

② 〔　ア　〕・〔　イ　〕に入る語を本文中から漢字二字で探し、書きぬきなさい。

(9)

本文の内容に合っているものを二つ選びなさい。

ア　有事の場合は、日常生活以上に不安や緊張に陥っていることが多く、うわさによって関係性が強められやすい。

イ　多様な価値観が混在する世の中で、情報としてのうわさに惑わされない確かな物差しを自分の中にもつべきだ。

ウ　保健学的見地から、密接な人間関係の中では固い絆が存在し、それを維持するためにもうわさが役立っている。

エ　ゴシップによって気持ちを共有したり集団規範を体得するなど、我々にとってゴシップは一義性の高いものだ。

オ　コミュニティの中で、つかず離れずな人間関係を保ち続けている方が、精神衛生上良いということが分かった。

五　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

中学校時代にいじめに遭い、中学校を卒業しなかった潤間さやかは、大阪にある夜間中学校に通うことになった。夜間中学校には年齢や国籍を問わず、学び直しをしたい生徒が集まっていて、さやかは徐々に夜間中学校に馴染んできた。友だちになったベトナム人のスアンを迎えに一年一組の教室に向かったところ、日本語を学ぶ識字の授業をやっていた。

「『あ』『お』『ぞ』『ら』。これで『あおぞら』と読みます。はい、一文字ずつ、声に出して読んでみましょう」

「あ・お・ぞ・ら」

教師に言われて、生徒たちが声を揃える。

「『あ』いう字ぃは、ほんまに難しいねぇ、先生」

「『お』かて、たいがいやわ」

「『ら』なんか、釣り針にしか見えんがな」

高齢の生徒たちが口々に訴えている。

えっ、とさやかは固唾を呑み込む。Ⓐ強烈な違和感があった。

「そうですね、五十音の中でも、『あ』は手強いです」

教師はプリントを配りながら、けれど、と慰める口調で続ける。

「『あべの』『あびこ』『あしはら』『あじがわ』等々、皆さんに馴染のある地名にも使われてますからね。しっかり覚えておきましょう」

点と点をつなげば、「あ」という字になるよう工夫されたプリントなのだろう。生徒たちは背中を丸め、鉛筆の芯を舐め舐め、懸命に書き取りを始めた。

「平仮名さえ、こないに難しいんやで。漢字を読んだり書いたり出来るようになるんは、一体、何時のことやろか」

「寿命があるんかねぇ」

あちこちで、切ない嘆きが洩れ聞こえた。

何で？　どうして？

スアンのようなニューカマーならともかく、普通の大阪のおっちゃん、おばちゃんが、何で今更、「あおぞら」なん？

ほんまに字ぃ、読まれへんの？　書かれへんの？　ほんまに？

違和感の正体は、そんな疑問だった。

「潤間さん」

背後から呼ばれて、肩をぽん、と叩かれた。驚いて振り向くと、担任の江口が立っていた。

「識字クラスの授業を見るのは、初めて？」

問われて、さやかは深く頷く。そして江口先生に、教室の窓際に座る老女をそっと指し示した。

八十路近い女性が、Ⓑ［　　］乱にプリントの「あ」という文字をなぞっている。

「あのひと……あの生徒さんは、私の祖母と同い年くらいやと思います。けど、字が読めへんて……書けへんて……」

あとは言葉にならず、言い淀む。

戦争や貧困や病などで学校に行けなかった――そういう事情は見聞きして、充分に知っているつもりだった。

けれど、まさか……。

声を失し、棒立ちになるさやかに、教諭は、

「これが、現実なんよ」

と、平らかに告げた。

教室では、生徒たちが各々、プリントと格闘している。その授業風景に目を向けたまま、江口先生は声を落として、こう続ける。

「文字を読めない、書けない――そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか。考えてみてね」

あ・お・ぞ・ら

あ・お・ぞ・ら

再び、音読の声が廊下まで流れてきた。

「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。憲法二十六条では、このように」

社会科の教科書を、担当教師の田宮がゆっくりと読み上げている。
二年三組の生徒たちは、教科書を目で追い、時々は小さな声で唱和しつつ、「教育を受ける権利」について学んでいく。
あ・お・ぞ・ら
耳の奥には、先刻の識字クラスの生徒たちの声がこびりついて、消えることがない。さやかは教科書から視線を外し、そっと周囲を見回した。
中国残留孤児だった蕗子、在日の正子＊ハルモニ、ほかにも戦禍や貧しさのため、学齢期に学校に行けなかったひとたち。
今、当たり前のように机を並べているけれど、皆、識字から……あそこからスタートしたのだろうか。
国語、英語、数学、社会、理科。
中学で学ぶ五教科全てを、識字から始めて身に付けようとするなら、どれほどの根気と努力が要ることか。
それでも学びたい、と思うのは何故だろう。その熱意は何処から生まれるのか。考えても、考えても、さやかにはわからなかった。

識字の授業を見て以来、元気のないさやか。同級生の遠見と在日韓国人の正子ハルモニ、正子ハルモニの車いすをひく介助者と下校しているときに、さやかは識字の授業のときのことを話す。すると遠見と正子ハルモニは自分の体験を語りだした。

「わしも正子ハルモニも、識字から始めたよって、そらぁ、大変やった。最初に教わったんが『つ』『く』『し』やったから、まだ何とかなった。けんど、あれが『あ』やったら、とうにくじけてるやろ」
なぁ、正子ハルモニ、と同意を求めて、遠見は切なげに瞬きをした。
「中国残留孤児やった蕗子さんは、それでも十歳までは日本語の教育を受けてはったよって、進級も早かったけど、わしは……」
ゼロから始めてここまで来るのに六年かかった、と苦しげに遠見は話す。
「私は七年。七年かかったんよ」
柔らかに、正子ハルモニが口を開いた。
「それでも奇跡に近い、と思える。何せ、読むことも書くことも、どっちも全く敵わなかったんやからねぇ」
正子ハルモニの言葉に、車椅子を押していた介助者が深く頷いていた。
飲食店、ドラッグストア、金融業、コンビニエンスストア、等々。駅周辺の繁華街には、電飾で縁取られた看板が林立し、文字が洪水のように押し寄せる。
「こんなに文字が氾濫してるのに……」
読めなかったら。
書けなかったら。
Ⓒそんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐっと呑み込んだ。
皆の歩みが自然に、遅くなる。
ポケットに、と遠見が自分の上着のポケットに手を入れてみせた。
「ポケットに、いっつも包帯を入れてたんや」
「包帯を？　何で？」
さやかに問われて、遠見は気弱な笑みを浮かべる。
「仕事場でも役場でも何処でも、何かを『書け』と言われそうになると、手ぇに怪我した振りして、誰ぞに代わりに書いてもらうためやがな」
遠見がポケットから手を出した。その掌に、丸められた包帯が見えるようだった。
私は、と正子ハルモニが声を低める。
「私は眼鏡やった。よう眼鏡を忘れた振りをしたんよ。代わりに読んでもらうためにねぇ」
――これが、現実なんよ
江口先生の言葉が、その表情が脳裡にありありと蘇る。
――文字を読めない、書けない。そのことが、あのひとたちに、どれほどの過酷な人生を強いたのか
もしも、字が読めへんかったら……
書けへんかったら……
それが私やったら……
Ⓓ足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて、さやかは両の足を踏ん張った。そうしなければ、立ってはいられなかった。【中略】
「字ぃを知らんでも、生きてはいける。けどねぇ、子どもの通信簿もよう読

んでやれんかったんよ。娘の不思議そうな、悲しそうな顔は、何十年経ったかて、忘れられへん」
当時を思い出すのか、老女の声が湿りけを帯びていた。
「文字を知らんから、何遍も騙されて。家も財産も全部、持っていかれたこともあったわ」
今なら相談する窓口もあるだろうが、当時は泣き寝入りするほかなかったのだという。
「そんな……ひどい……」
かける言葉も見つからず、さやかは声を失するよりなかった。
友の受けた理不尽を我が身に置き換え、俯くばかりのさやかに、正子ハルモニはそっと手を差し伸べる。
「せやけどねぇ、さやかちゃん」
友の皺だらけの手が、さやかの手をそっと掴んだ。
「夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはでけへんの」
正子ハルモニの一言に、さやかは不意を突かれる。
ホームに、電車が到着する合図の音楽が流れて来た。【中略】
「ほな、さやかちゃん、お休み。また明日、学校でね」
掌にぐっと力を込めてから、正子ハルモニは、さやかの手を放した。【中略】
友の温もりが、握る手に込められた力が、まださやかの掌に残る。
学校はおろか、文字さえも与えられなかった正子ハルモニ。
何もかも与えられながら、それを当然としか思わなかった自分。
――夜間中学で手に入れた文字は、もう誰も私から奪うことはでけへんのあ・お・ぞ・ら
正子ハルモニの言葉に、識字クラスの授業風景が重なる。
ああ、とさやかは思う。
ああ、そうか、と。
『学び』とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄える、ということなのか。
誰のためでもない、自分のために。
自分の人生のために。
「Ⓔ強いなぁ、強いわ、ほんまに」
思わず、声に出していた。
それに比べて、自分は何と「あかんたれ」なんやろか。
血を吐く思いで自身の中に蓄えたものなど、何一つないように思う。全て、当然のものとして受け取ってきた。
強くありたい。強くなりたい。
Ⓕ正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐっと拳に握りしめていた。

【中略】

七月七日、七夕。
思い思いの願い事を記した色とりどりの短冊が、笹竹の枝がしなるほど、沢山、吊り下げられている。
「さやかちゃん、内緒やけどな。私、五枚も書いてしもたんよ」
並んで笹飾りを眺めていた蕗子が、さやかに囁いた。進路のこと、家族のこと、仲間のことなど、願い事をひとつに絞り切れなかった、という。
「五枚は凄いなあ。私なんか結局、何も書けなくて、今回はパス」
さやかは友に囁き返して、短冊に書かれた皆の願い事を読んでいく。
平和
家内安全
しんぶんがよめますように
無事に卒業できますように
かんじをいっぱいおぼえたい
短冊に込められたそれぞれの願い事が、黄昏色に染まり始めていた。
「ほな、織姫さんと彦星さんに見えるよう、校庭に移しましょか」
鈴木先生の合図で、廊下の柱に括り付けられていた笹竹が外される。三人がかりで、ゆっくりと校庭へと運ばれようとした時だった。
「待って、待って」
「先生、私たちのも飾ったってんか」
一年一組の生徒たちが、手にした短冊を振り振り、階段を下りてくる。中に、高齢の生徒に手を貸すスアンの姿もあった。
「階段、危ないから、焦らなくて大丈夫ですよ。ゆっくりで大丈夫」

開いた掌をメガフォン替わりに、江口先生が叫ぶ。
識字クラスの生徒たちが胸に抱くようにして持ってきた短冊を認めて、教師たちが何とも嬉しそうな顔つきになった。
「せっかくやし、自分たちの手ぇで笹竹に結びましょか。てっぺんに近いとこが空いてますよ」
養護教諭の提案を受け、教師たちは笹竹を傾けて、「ここ、ここ」と笹の頂上を生徒たちに示した。
Ⓖカラフルな色紙の短冊に記されているのは、皆、同じ言葉だった。
あ　お　ぞ　ら
どれも、紙一杯、はみ出しそうに大きく、力強い筆跡で書かれている。
「あ・お・ぞ・ら」
その場にいた生徒たち全員が、一字、一字、区切って大きな声で読み上げた。
「『あべの』の『あ』や」
「『あびこ』の『あ』やんか」
「『あいしてる』の『あ』やで」
その文字でてこずった経験があるのだろう、皆、目を瞬いて眺めている。

苦しいこと、辛いこと、悲しいことは沢山あった。けれど、この先の人生が青空でありますように。
日本に暮らす我々も、祖国の大切なひとたちも、この世界で生きる皆が、青空に恵まれますように。
ありとあらゆる祈りと願いが詰まった四文字だった。
夕映えの空、目を凝らせば、一番星の在処が分かる。
教員たちの手で校庭脇のフェンスに括り付けられた七夕飾りを、さやかはひとり、近くまで行って、見上げた。
空に一番近いところに、「あおぞら」と書かれた短冊が何枚も提げられている。
Ⓗ綺麗、とさやかは思う。
何て綺麗なんやろ、と。

＊ハルモニ　朝鮮語で「おばあさん」の意

（髙田郁『星の教室』角川春樹事務所）

(1) ——Ⓐ「強烈な違和感があった」とありますが、どのような違和感ですか。
ア　教えられている内容について、生徒が口々に不満を言いながら授業を受けていることへの違和感。
イ　生徒にわかりやすいようにプリントを作ったり、先生が慰めながら授業をすすめていることへの違和感。
ウ　必死に学ぶ生徒たちの様子を見ていて、消極的な自分が夜間中学校に通っていることへの違和感。
エ　外国人だけでなく日本人の高齢者にもかかわらず、平仮名の読み書きに苦戦をしていることへの違和感。

(2) ——Ⓑは「一つのことに集中して他のものに注意をそらされない様子」という意味の四字熟語です。空らんに漢字三字を入れて、完成させなさい。

(3) ——Ⓒ「そんなん、想像も出来へん、という台詞を、さやかはぐっと呑み込んだ」とありますが、なぜですか。説明をした次の文の［①］、［②］に入る言葉を本文中から探し、書きぬきなさい。

［①（七字）］などの理由で学校に行けず、識字から学ぶには相当の［②（五字）］が要ることを思うと、軽はずみに発言することがためらわれたから。

(4) ―Ⓓ「足もとが、大きくぐらりと崩れるような錯覚に襲われて、さやかは両の足を踏ん張った」とありますが、どのような様子が読み取れますか。

ア　さやかは、遠野や正子ハルモニの識字や生い立ちについての話を聞いても、全く共感できないことに気づき、深い罪悪感を感じた。
イ　さやかは、遠野や正子ハルモニの識字にかかわる経験を聞き、これまでの常識が根底から覆されるほどの強いショックを感じた。
ウ　さやかは、想像をはるかに越えるつらい思いをしてきた遠野や正子ハルモニへの理不尽な周囲の人間に対し、大きな怒りを感じた。
エ　さやかは、想像していたよりも過酷な環境を生きぬいてきた遠野や正子ハルモニと比較して、自分の生活にありがたみを感じた。

(5) ―Ⓔ「強いなぁ、強いわ、ほんまに」とありますが、このときの〈さやか〉の思いはどのようなものですか。「教育」・「正子」・「自分」という三つの言葉を必ず用いて、正子と比較した上で〈さやか〉の心情を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

(6) ―Ⓕ「正子ハルモニの感触が宿る掌を、さやかはぐっと拳に握りしめていた」とありますが、このときの〈さやか〉の心情はどれですか。

ア　つらい経験を経て学んできたことに自信をもっている正子ハルモニの思いを受け止め、自分も困難に負けず学ぼうという決意。
イ　つらい経験を聞いてくれたさやかへの感謝の気持ちを受け止めて、今度は自分が正子ハルモニに恩返しをしたいという願い。
ウ　さやかにはこれ以上つらい経験をしてほしくないという正子ハルモニの思いを受け止め、これ以上心配をかけまいという覚悟。
エ　元気のないさやかを心配させまいとする正子ハルモニの気遣いを感じ、頑張ればきっと結果を出せるという自分への励まし。

(7) ―Ⓖ「カラフルな色紙の短冊に記されているのは、皆、同じ言葉だった」について、次の問いに答えなさい。

①　短冊に記されている言葉は、識字クラスの生徒にとってどのような言葉ですか。本文中から二十字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。
②　短冊を大切にしている識字クラスの生徒の気持ちが読み取れる行動を、本文中から十四字で探し、はじめの三字を書きぬきなさい。

(8) ―Ⓗ「綺麗、とさやかは思う。何て綺麗なんやろ、と」とありますが、そのように感じたのはなぜですか。

ア　学んだ一つ一つの言葉が確かにその人たちの中にあり、その思いを表した色紙に希望を感じたから。
イ　平和を願う色紙が多く提げられていて、世界中の人々の喜びが映し出されているように感じたから。
ウ　一人ひとりの願いが込められた色紙に世界の多様性を感じ、自分も世界の一員だと強く感じたから。
エ　皆の願いが込もった色紙と空に輝く一番星が見えて、やっと七夕を祝うことができると感じたから。